

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

82

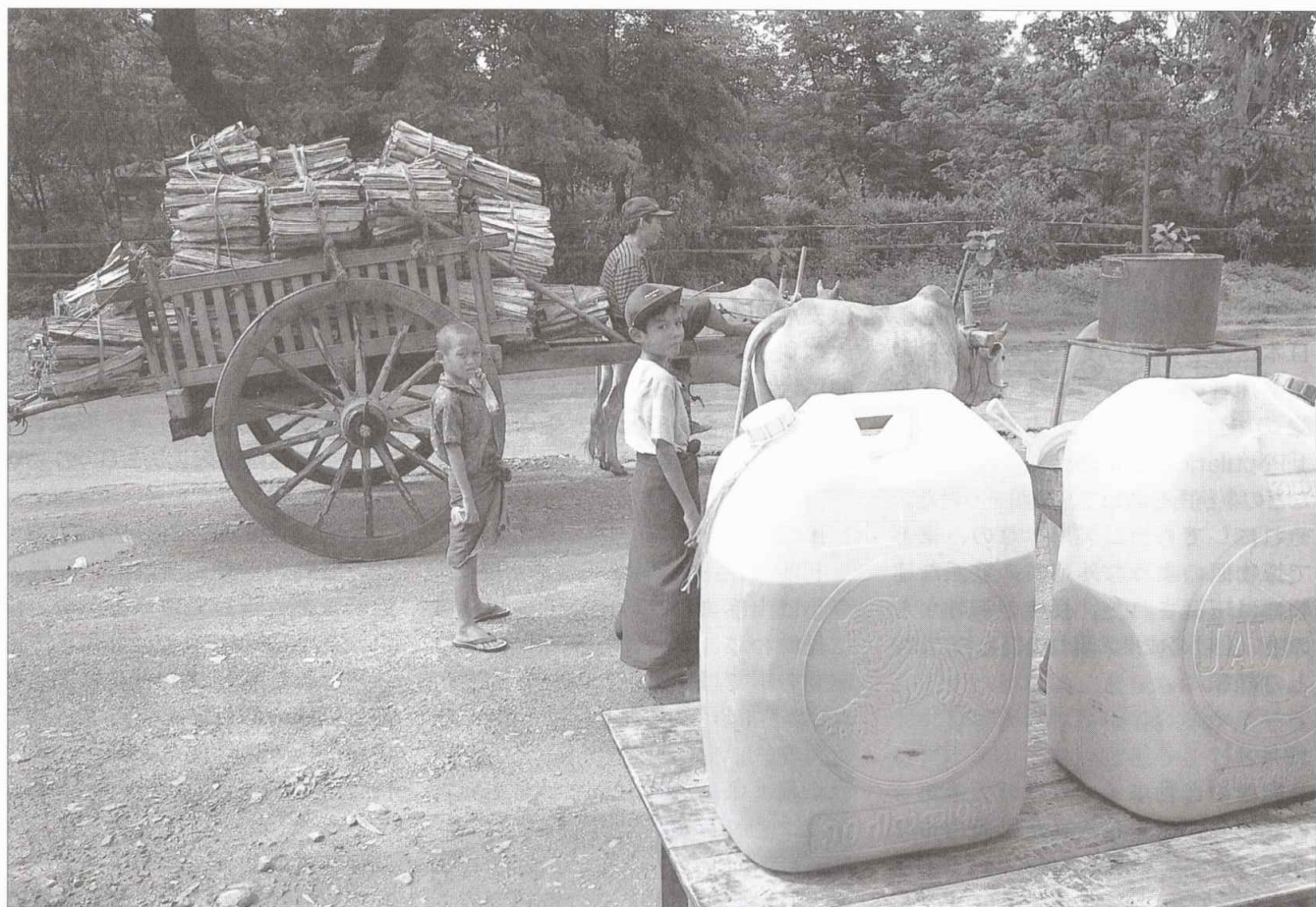
2002・3

- 20周年記念行事報告
- 研修生レポート

・・・ 3-5, 8-10P
・・・ 6-7P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行： 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人： 藤野 達也
住所： 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
e-mail phd@po.hyogo-iic.ne.jp
定 価： 100円



ビルマ、カレン州 撮影 FUJINO.T

幹線道路沿いにいくつも並ぶ
私設のガソリンスタンド。
ポリタンクと簡単なポンプだけ。
本当は政府直営のスタンド以外は営業できないらしいけど
そこは混んでて、この商売が成り立つとか。
でもむこうのお父さんには関係ない。
牛はガソリン飲みませんから。

東西南北 問題解決 取組日記

11月×日

東日本研修旅行を他の職員に任せて、英国、ロンドンへ。日本と英国のNGOの話し合い「日英NGOパートナーシップ」に参加。はじめ東京のNGOを中心に組まれていたが、地方のNGOの参加も必要との誘いを受け出かけた。5泊6日の短い滞在のうち、英国外務省の建物の中で3日間の本会議。いくつものテーマに分かれ、日英双方のNGOから発表があり、その後地域と質疑応答。初めての企画でもあり、テーマを掘り下げて話し合う時間とまではいかなかったが、今後の協力に向けての一步となった。日本側がNGOの先進国、英国から学ぶものはたくさんあるが、英国側が日本に何を期待しているのかが日本側参加者の中で話題になった。本会議の後にはロンドン市内にある「Population Concern」「Oxfam」などの事務所を訪ねて、説明をうけた。それにしてもテムズ川べりの、まるで博物館のような外務省の立派な建物には圧倒された。長年の海外からの吸い上げの成果の現れのひとつでは？との声も。

12月×日

関西の自動車メーカーの労働組合の研修会に招かれ、兵庫県篠山市で「NGOから見た世界経済」というお題でお話をする。この経済情勢の中で、労働組合も賃上げと労働時間短縮だけを要求するものではなく、また自社の儲けだけではなく社会の役割を考えている。PHDの活動から見えるアジア・南太平洋地域と日本との経済的つながり、そしてそれが草の根の人々に及ぼす利益、不利益を中心に話す。自分の会社やそこに住む人々だけのための経済活動ではなく、世界を視野にの企業活動、それに組合員が何を働きかけるかについて意見を交換した。これからのいろいろな分野の組織と交流していきたい。

12月×日

恒例の北タイツアー。チェンマイでは10月にお招きしたタイ・カレンパプティスト会議の総主事サニーさんに再会し、今後の協力体制、方法について協議する。サニーさんから日本からの専門家派遣の希望が出された。農業分野だけではなく電気工事など村レベルのインフラ整備の必要にも要請があった。この件はさらに詰めていきたい。チェンマイから車で6時間の山の村ムシキーで気になっていたのが、昨年聞いたブラチャックさん（98年度）の畑に持ちこまれた台湾資本の契約栽培の話。試してみても、作物はそれなりにできる判断が出たようだったが、市場への足の確保、時間の面から今の状況では商売にならないとの結論になったようで、すでに台湾の人は引き上げていた。今回はこの結果となったが、道路整備の進展により、この手の話はまた持ち上がる可能性は十分。村人の利益を守ることや、もっと根本的には自給と販売することのバランスなど、こういった動きへの対応を一緒に考えていきたい。

1月×日

下関から西日本研修旅行を引き継ぐ。今年は今陰まわりの年。予想通り雪に見舞われ、ノーマルタイヤ、2輪駆動の車ではチェーンが絶対必要。なぜか熱帯からのケユーンさんがチェーン脱着が上手で、大助かり。

島根、広島、岡山を移動する間アフガニスタン復興支援会議に先立つNGO会議への2NGOの参加拒否を発端とした騒動がおこる。各地で皆さんのお家に泊めていただく時の話題に。NGOという言葉がより知られることにはなったが、その伝わる中身は必ずしも好ましいものではない。外務省からお金をもらうのがNGO、政府に反対するのがNGOなど、一部の事実を全てに当てはめるような伝わり方。NGOは「非政府」というだけのとて、政府からお金をもらうところもあれば、もらわないところもある。批判をするところもあれば政府と同意のところもある。右から左まで、規模、分野、質も様々。それをまず押さえないければ。ODAにも良いものも問題もあるよう

に、NGOの全てがどうと一言では言えない。

参加は強制ではないのだから活動の中身が納得のできる好ましいNGOを見つける必要がある。逆にNGO側は多くの人々の支持が得られるように質を高める努力がいるということだ。また、一民間の組織がもし政府のお金を受けるのであれば、それはもとは私たちの税金をいただくことになるのだから、公の利益や福祉にかなう使い方になるよう、今迄以上に心しなければ。ODAを批判するのであれば、それと同様に誰にどう使うのか、無駄をないのか、評価はきちんとされるのかをNGOにも当てはめなければならぬ。

地方のNGOは、中央政府や国会議員と直接やり取りすることはあまり機会がないので、妙な関係に巻き込まれることは少ないとも言えるが、そういった消極的な立場ではなく、お金を貰う、貰わない、一緒に何をやる、しないに関わらず私たちの税金の使い方の1つとしての一兆円の予算規模のODAに対して、意見を言うていくことは国際協力NGOの大切な役割だと思う。

言った、言わないのレベルではなく、この騒動から見えた政治、行政の不透明さを改善していくことや、特定のNGOがどうこうではなく、一市民の声であるNGOの存在を軽視する政治、行政のあり様を変えていくことにつないでいけばこの騒ぎも意味を持つ。災い転じて福としていきたい。

2月13日

新しい年度の計画と予算を決める理事会とそれに先立って評議員会が開かれる。20年の振り返りから出された意見も取り入れたものを提案、承認を受けた。研修生は対象地域の変化に対応できるようこれまで以上に地域の様子を知る事に力を入れフォローアップを強化し、啓発は財政面の強化につながる支援の拡大と国際協力と国内の課題との関連を意識したプログラム展開を掲げた。また、理事としてライスバレーA.C.代表（元さくら銀行常務取締役）米谷収さんに新しく加わっていただくことになった。

総主事代行 藤野達也

20周年記念行事 アジア・南太平洋地域づくりシンポジウム

「共につながり、共に生きる私たち」報告2

前号に引き続き昨年10月6、7日神戸市シルバーカレッジで行われたの20周年記念行事を報告します。

■ 基調講演

「地域の国際活動が世界を変える」とみのきいちろう 富野暉一郎さん 龍谷大学法学部教授



激動する国際社会の中で日本の私達がどのように世界と関わり、地域作りをどのように進めるべきかと考える時、キーワードはシェアリングつまり共生とか分かち合いです。グローバル化という考え方があります。物や情報の流通を単一化して盛んにし、競争が豊かさを生み出して人々を満たす。これらを中心に世界を作っていくという非常に単純かつ楽観的な考え方です。しかし世界は単純ではなく、一つの価値観で括れるはずがありません。異なるものがある価値観でひとくりにするのは危険です。それでは生きられない人々が出てきます。その人たちは

■ 帰国研修生活動報告

研修生達の帰国後の取り組み、今後の課題について報告をうけました。

<タイ>

サニー・ダンボンピーさん

（タイ・カレン・パプティスト会議総主事）
私たちの地域から今まで11人の研修生達が日本で研修を受けた。彼らは、生活のしかたや性格までも変わり、仕事や仲間を助けるという面でいい結果がでている。しかし、農業技術だけでは村は良くならない。例えば、日本では畑に水が一年中引けるが、タイでは雨が降らない時期がある。だから作物を作る時期はみんな一緒に値が下がってしまう、そういうところでどう対応するかがこれからの課題だ。

<ネパール>

バラト・ビスタさん

（82年度・農業、林業、養鶏）
NGOを立ち上げ、家畜の餌作り、女性のグループ作り、リプロダクティブヘルス、飲み水、学校などのプログラムを行っている。今では人口75,000人の地域に100のグループがで

生きるために戦わざるを得ません。他方、地域の特性やつながりを生かそうとする考え方もあり、それはローカライゼーションといわれます。地域や個人の関係を重視し、個別の価値観を大切に。こうした動きが21世紀では大切だと考えています。

人々が幸せに生きるには社会の公平性が重要です。例えば、税金をきちりと徴収し、行政のサービスを社会の全員に行き届かせること。しかし、日本で前者は優れていますが、後者はまだまだだと思えます。そうした公平な仕組みを社会に作ることも重要だと思えます。それは行政だけではできません。行政とNGO、NPOを含む市民の連携が必要ですが、日本はそれができていないと思えます。行政は組織も力もあるが、勝手に動いてしまう。市民は行政を批判する

きた。活動資金は、外のNGOからだけでなく、村人からも集めている。

ラダ・バンストーラさん

（83年度・編物、洋裁）
川の近くのスラムに住む低カーストの女性を集め、字の読み書き、編物、洋裁を教えた。今までに35人に教え、技術も上達し、セーターを編んでいる。しかしネパールの気候は地域で差があり、寒いばかりでなく、毛糸のものは高価であるため、ネパールの庶民には売れない。販路の開拓が課題だ。

ショーバナ・シュレスタさん

（85年度・編物、洋裁）
カトマンズで洋裁と編物のグループを作り教えた。現在でも10人ぐらいが活動を続けている。日本人と結婚し、現在日本に住んでいるが、日本ではネパールの人たちの暮らしぶりや、貧しく物が少ない中にもある良さ、楽しさなどを学校で話している。

サビトリ・シュレスタさん

（97年度・保健、編物、洋裁）
帰国後、栄養と保健の話をしてい

だけでなく、より良くするために提案し、関わる必要があります。そうすることで民主的で公平な社会が作られていくのです。

また今後は外国人との共生も大きな課題です。これまで日本はODAでもNGOも国際協力で海外の平和構築のために努力してきました。海外で現地の人と異なる価値観を共有しながら努力してきた訳です。ところが国内でそういう努力が足りなかった。足元でできないことが海外でできる訳がありません。ここでも分かち合い共生することが求められています。こうした動きは一人だけ行わず、働きかけも成果もみんなで分かち合うことが大切です。分かち合い—このことを大事にしながら自分たちの足元である地域社会を作りあげていくことなのです。

（注：紙面の都合上内容を編集部でまとめました。）

るが、地域の女性たちにとって栄養や保健の話はあまり興味をひかないようだ。そこで「今日は子どもの服を作りましょう」と誘い、みんな集まったところで、保健と栄養のことも説明している。

<インドネシア>

アリ・ムルティムさん（87年度・漁業）
91年に協同組合を作り、お金の貸し借り、漁具の販売、ガソリンの協同購入や販売をしている。約5000人の村に、今では400人メンバーがいる。村人たちと相談し、役場の力も得て村に港を作ることになっている。

<ビルマ>

トゥンティンさん（93年度・農業）
学んだことを村人に話すだけでは、なかなか理解してもらえず、自分が実際にやってみることから始めた。毎年1回ビルマ国内での研修旅行をしたり、村の若者30人ぐらいでグループを作り、村の銀行や移動図書館、田植えのグループなどを作っている。93年から循環型農業に取り組み、少しずつ村に広がりつつある。

分科会 7日朝、8つの切り口で20年を振り返り、これからを考えました。

村人の自立を目指して

報告者 ラダ・バンストーラさん/ネパール・83年度
サビトリ・シュレスタさん/ネパール・97年度
ショーバナ・シュレスタさん/ネパール・85年度
ジョシー・ソリアーノさん/フィリピン・サフルディ代表
寺田 栄さん/頌栄人間福祉専門学校・学生

研修生の帰国後のフォローアップのひとつとして、ネパールからはセーター、タイ・カレンからは布を買っている。ネパールのラダさんからは「帰国後、まず字を教えることから始め、洋裁と編物を教えるようになった。現在編物で得た収入は子供の洋服、靴下、本、鉛筆等にあてている。問題は編物ができるようになってセーターを編んでも、売れないとお金が入らず材料も買えない」、サビトリさんからは「編物をしながら栄養・保健について話しをしている」

等、それぞれ帰ってからの活動と現在の状況についての報告があった。またタイ・カレンの布グループの村に3ヵ月滞在していた寺田栄さんからは「活動を開始してから10年が経つムシキーは組織的に確立し、グループとして運営が行われているが、PHD以外の市場開拓に至っていない、4年目のメーサリアングループ「ルチョコ」はグループとして未熟で、若い研修生の思いを村人に伝える難しさ」等、グループの課題について報告があった。ネパールとタイ・カレンの共通した課題は作っても売り先がない、また布グループの課題として構成員としての意識が低く、決まりごとが守られないことがあげられた。これら

ンターパートであり、フェアトレードに関わっているサフルディのジョシーさんからは、「ネパールにもタイにもフェアトレード団体が集まって構成している組織があるので、そこから情報を得ること、そしてグループの意味を村の人たちに理解してもらう努力を続けること。PHDに対しても、地域グループの強化、研修生の能力開発の促進、村に帰ってからの活動の戦略を共に考え、余裕があればマーケティング・促進販売の手伝いをする」との提案があった。村の人々がどういう生活を求めているのかを研修生、村の人、PHDで話し合っていく。そしてそれをもう一度PHD活動の目的とすり合わせる必要がある。その後、PHDができること、できないこと、村の人ができること、お互いに協力してやっていく部分を明確にし、上記の提案を具体的に進めていけば良いのではという結論に達した。

農村開発とグローバリゼーション

～国際化の波が押し寄せるアジアの村々～

報告者 本野 一郎さん/兵庫六甲協同組合職員
アリ・ムルティムさん/インドネシア・87年度
サニー・ダンポンピーさん/TKBC総主事

研修生の出身地域がどのようにグローバル化の影響を受けているのかから始まった。「日本に来た13年前、村には港も電気も何もなかった。しかし9年前に電気が通り、その後すぐに電化製品が普及した。今ではTVの普及率100%、冷蔵庫約50%、一部にはDVDやパソコンもある。それと同時に、皆が物を欲しがり、泥棒をする人もでてきた」とアリさん。サニーさんによると、「子供の頃は村からチェンマイまで歩いて4日、今は車で6時間。交通事故が増えたため“ヤマハ病”や“トヨタ病”という言葉まである。また、いろいろな製品を買いたいために収入の不安定な農民が借金漬けになっている。そして、村人たちは現金

を求めることに必死になって、昔からの地域や家庭の温かいつながりが消えつつある」このように、研修生の出身地域は日本が高度経済成長期に経験した急速な変化以上のスピードで物質的にも精神的にも変化している。そこでPHDがこの流れにいかに対応すべきかを尋ねた。アリさんは「帰国後日本で勉強した事を全部生かすことはできなかった。これからの研修生には村ですぐ実践できる技術や、水俣病等の社会問題もたくさん教えてあげて欲しい」研修生それぞれの村の実情にあった協同組合づくりを毎年お話いただいている本野さんからは、タイでイチゴ栽培を行っているコマさんを例に挙げ、「帰国後自分で販路を切り拓いていた頃に彼が考

えた事は“村の協同”。しかし仕事が軌道に乗り、海外の商社と契約栽培を始めた頃から彼は協同の精神を忘れ始めたのではないかと指摘。その上で「PHDの研修はいかにして協同の場や精神を身につけるかという点では成功している。しかし、グローバル化の流れに抗するために、ただ村の自給を掲げても有効ではない。資本を形成することが悪なわけではなく、いかに村の協同性を維持しつつ資本を蓄積し、その資本を長期的な展望でどう使うかを考えることが大切」とアドバイスをいただいた。サニーさんも帰国した研修生へのフォローアップの重要性を強調。従来のやり方に加えて、低利子で融資を行う小規模な銀行の設立等の新たな取り組みも提案された。大きく難しいテーマで、答えが簡単に出るものではないが、PHDはこれからも皆さんと一緒に考えながら歩んでいきたい。



援助と自立

報告者 トウンティンさん/ビルマ・93年度
バラト・ビスタさん/ネパール・82年度

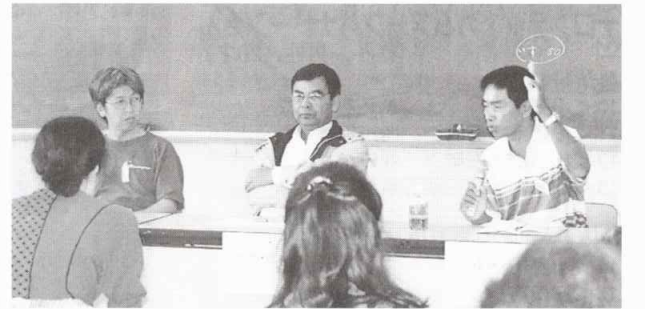
国際協力は役に立っているのか、ヘタをすると役に立つどころか、かえって害になることだってあるかも知れない。支援を受ける側の2人、ビルマのトウンティンさん、ネパールのバラト・ビスタさんから話を聞いた。

トウンティンさんの村ではある団体によってポンプが設置された。また町の団体がミシンを持ち込んで2週間の裁縫教室が行われた。ポンプは壊れたときに誰が直すのかでもめ、裁縫はその期間が終わるとミシンは持ち帰られ、定着しなかった。また別に、あるリーダーがミシンを買い与えて裁縫グループを作ったが、ミシンは私的なものとなりグループは続かなかった。村の人は物をもらえることは嬉しくて、歓迎するけど、それが村を良くすることの働きにつながることは少ない。モノがあるうち

だけになりがちだし、それが全ての人にあらならない時はかえって問題にもなる。

バラトさんのグループでは海外の団体からも支援をうけて、水道整備、家畜の餌の確保、女性の教育向上などに取り組んでいる。そのときに外国からのお金だけでやろうとすると村人が受け手になってしまって、自分達で進めていこうという気がなくなってしまう。また、ヨソからの資金を懐に入れてしまうことも起こりがちになる。

外からの働きかけがないと、村人だけで何かを始めよう、変えようとはなかなかならない。ところがそれを一部の人だけで仕切ってしまうと問題が起こりがちである。村の人が出せるモノやお金は少ないけれど、意見や知恵は出せる。労力も出せる。村人の参画を取り入れていかないと継続したものにしないというのが2人からの共通した



ODAとNGO ～それぞれの役割と協力の可能性を探る～

報告者 神田 浩史さん/ODA改革ネットワーク事務局長
十 郎 正義さん/国際協力事業団・兵庫国際ナショナルセンター総務課長

まず神田さんによりODA（政府開発援助）とNGOの関係史が整理された。80年代まで両者は「敵対関係」だったが、90年代に入り、対話が始まった。その背景にはNGOへの社会的認識、地位の向上に加え、NGO側もODAの一方的批判だけでなく具体的な提案をするようになったことが挙げられる。93年にカンボジアへの農業援助が日本の消費者とNGOの働きかけによって停止されたことは象徴的であり、このことが「ODAを変えられる」という自信になった。95年頃から具体

的対話関係が確立。外務省、JICA、財務省などとの定期協議を行い、現在では共同事業を行うまでに至った。こうしてこの10年、対立から対話、そして協業へと関係は変化したが、NGOが使用するODAの金額は3%と、援助を行う他国の平均、30%にはまだ及ばない。しかし、こうした現状の責任を官庁にだけ押しつけるべきでないと神田さんは主張する。さらに、ODAは我々の税金や郵便貯金が資金源であり、NGOが行政の「下請け化」せず、また発展途上国の市民を主人公とした援助を実現するには、ODAや官庁の一方的批判だけでなく、日本の市民社会やNGOがその責任を問われていると問題提起した。これに対して十郎さんは、神田さん提起の関係史に基本的に同意しつつ、今後JICAがODA

指摘である。足らずは外からの支援で補うことは必要だが、地域の人々にできることは、自分達でやっていくことを引き出さないとダメ。さらにいきなりモノ、カネではなく、それを出す前の事前調査や打合せを十分に行うことや、似たような問題を抱える他地域の人との交流のような経験の為の支援は嬉しいとの話も出た。ビルマもネパールも政情が安定していないところが村の生活にも関係する。ここを村人の取り組みだけで解決することは難しい。ところがここには日本の外交やODAが影響力を持つ。そこに対して働きかけができるのは日本の人たちである。直接的な支援だけでなく、こういった間接的なものの重要さも指摘された。

を実施するにあたり、NGOや市民とパートナーシップを構築し、互いの「いいとこ取り」をすることで共によい援助を作ることができるのではないかと述べ、JICAのNGO対象事業や兵庫センターの取り組みを具体的に説明した。中でも01年度より立ち上げの連携推進委員会について、全国のJICAのセンターなどで地元のNGOや自治体など協議しながら事業を進める予定であることを述べた。こうした提起に対して、多くの質問が出たが、中でもNGO、ODAともにきちんと情報公開されているのかが疑問との意見があった。これについては双方とも情報公開、広報の充実が必要との認識を示す一方、神田さんから市民も情報を読み解く力をつける必要があるという指摘もあった。最後にODAでもNGOでも国際協力をより良くするのは市民の手によるものであると確認し、まとめに代えた。(8ページに続く)



研修生レポート

19期生 (2001.10月中旬～2002.2月末)

アルウィ・フアドリさん
(インドネシア、男性、28才)

- 農業研修
 9.<鹿児島県鹿児島市、始良郡、熊毛郡>
 かごしま有機生産組合、市川克久、浦辺誠
 10.<三原郡南淡町> 山口勝弘
 11.<神戸市西区> 渋谷富喜男
 12.<小野市> ふえろう村塾

ケユーン・カヨータさん
(タイ、男性、29才)

- 農業研修
 9.<鳥取県江府町>
 鳥取西部農業協同組合日野農機・自動車センター
 10.<佐用郡南光町> 真柴三幸
 11.<神崎郡市川町> 牛尾武博
 12.<小野市> ふえろう村塾

ナロンテッ・カムヌーンバナドーンさん
(タイ、男性、20才)

- 農業研修
 10.<小野市> ふえろう村塾
 11.<愛媛県丹原町> 西川則孝
 12.<出石郡出石町> 寺田まさふみ
 13.<加東郡社町、明石市>
 兵庫県農林振興事務所、南兵庫クボタ土山支店
 14.<小野市> ふえろう村塾
 15.<三田市> 春日朋子

シコン・ドンさん
(バプアニューギニア、女性、23才)

- 保健衛生・洋裁・農業研修
 10.<養父郡八鹿町> 太陽保育園
 11.<神戸市西区> (株)尾崎食品
 12.<芦屋市> くらふとぎやらりー多田
 13.<三木市> 三木市健康課、兵庫県三木保健所
 14.<小野市> ふえろう村塾
 15.<三木市> 高橋武子

東日本研修旅行

<愛知県>アユス東海～相念寺～トヨタ自動車労働組合～<神奈川県>PHD鎌倉交流会～<東京都>自動車産業労働組合総連合会～ロータリー米山記念奨学会～日本国際協力システム～アユス～仏教国際協力ネットワーク～恵泉女学園大学～<山梨県>山梨英和学院中学校～山梨県国際交流センター～敷島中学校～<長野県>松本教会～鈴蘭幼稚園～<岐阜県>国際ソロプチミスト高山～PHDひだ友の会～<愛知県>小牧教会～<岐阜県>国際ソロプチミストかかみ野

西日本研修旅行

<宮崎県>高鍋ロータリークラブ～<鹿児島県>かごしま有機生産組合～だるま保育園～<熊本県>水俣病センター相思社～熊本YMCA阿蘇キャンプ～<大分県>下郷農業協同組合～<福岡県>庄内町生活体験学校～福吉伝道所～祝町小学校～アジアを考える会北九州～<山口県>梅光女学院高等学校～梅光学院大学女子短期大学部～<島根県>弥栄村交流会～杵束小学校～高原小学校～瑞穂アジア塾～<広島県>広島YMCA保育園～平和学習～共生庵～三良坂小学校～三良坂小学校PTA～日影館高等学校～<島根県>木次町交

流会～寺領小学校～しまね国際センター～<岡山県>弓削高等学校～南北ネット岡山～福谷エコクラブ・福谷の自然を守る助っ人衆

共通研修

- 信長たか子 (神戸市/有機農産物消費者グループの歴史や運営)
 尼崎公害患者・家族の会及び尼崎南部再生研究所 (尼崎市/同地域での公害の歴史と現状)
 明石協同歯科 (明石市/口腔衛生)
 淡路島モンキーセンター (洲本市/農業の弊害)
 釜ヶ崎キリスト教協会 (大阪市/釜ヶ崎の歴史と現状)
 JA神戸西宮農センター (神戸市/協同組合)

兵庫県内研修旅行

八鹿町～篠山市～三木市～春日町～山崎町～高砂市～社町～姫路市

(敬称略)



交流会 (岡山市・南北ネットワーク)

昨年4月に来日した19期研修生たちの研修もいよいよ大詰め。技術的な研修はほぼ終わり、現在の日本が抱えている社会問題や近代化の過程で残してきた様々な負の遺産について学びました。それらの研修を通じて、研修生たちの出身地域が今後どのように「発展」していくことが望ましいのか、自分自身で考えてもらうきっかけになればと思っています。

公害に学ぶ

毎年恒例の西日本研修旅行で外すことのできない訪問先の一つが熊本県水俣市です。世界的にも知られる水俣病の起こった地を訪れ、その歴史や現在の水俣市と市民の環境やまちづくりへの取り組みを学びました。

「語り部の方から水俣病のことを聞きました。泣きながら話してくれました。とても悲しかったです。政府の人や工場の方は、水俣病の原因が工場の捨てる汚い水だとわかっていたのに仕事やお金の方が大事と違ってすぐにきれいにしようとしなかった。私の村には工場はないけれど、これからも欲しいとは思いません」とシコンさん。



水俣病歴史考証館にて

そして今年は、水俣に加えて尼崎の大気汚染の問題についても学ぶ機会を持ちました。水俣と同じように、問題が発生してから長期に及んでいる住民運動の歴史に、研修生たちは「自分たちの健康や周りの環境を守るために、一人ひとりが力を合わせて政府や工場と戦ってきたのはとてもすごいこと」と話していました。



グループ作りの大切さを聞く (下郷農業協同組合)

ホームレスの街で...

2月中旬には釜ヶ崎を訪れ、その歴史や現状についてのお話を聞いたり、夜回りや炊き出しのボランティアに参加させていただきました。来日以降、親切な指導者やボランティアの方々に支えられて過ごしてきた研修生たちにとって、2000人ものホームレスの人々を見るのはもちろん初めてです。

「この人たちの家族はどこですか。どうして家に帰って一緒に住むことができませんか」

研修生の村では、困った人がいれば、まずその家族が面倒を見ますし、周りの村人もご飯や仕事を手伝ってあげるのが当たり前。一見”豊か”な日本がなくなってしまったものを突き付けられた気がしました。

サルが教えてくれること

タイやインドネシア等の農村では、

農業の正しい使用法や危険性がほとんど知られないまま売られています。例えば、ナロンテッさんの村では「村の人は手袋もマスクもしないで農業を使います。だから、病気になり手の皮がボロボロになっています。死んでしまう人もいます」

こうして、研修生たちは農業の弊害を学ぶために淡路島モンキーセンターを訪れました。このモンキーセンターでは、餌付けを始めた1960年代の終わり頃から手足に障害を持ったサルが毎年平均17～8%の割合で生まれています。野生のサルではほとんど見られないことから考えるといかに高い数字かわかります。原因は当時海外からの輸入に頼っていたエサの大豆や小麦に残留していた有機塩素系農薬と言われており、30年以上の間その影響が現れてくることを目の当たりにした研修生たちは一様に驚いた様子。「サルも人間も同じ。このまま農業を使い続けると村でも同じようなことが起こると思う。早く村の人に教えたいです」

また、案内して下さった所長の延原さんは「サルの社会では障害を持ったサルも自然に受け入れられ、平等に暮らしている。このサルたちは、

我々人間に今の利益優先社会の落とし穴や共に生きることの大切さを教えてくれている」と話して下さいました。



淡路島モンキーセンター

研修指導者ノートより

絶やさぬ笑顔、素直さ、彼(ナロンテッさん)の持つ人格の素晴らしさはみんなをひきつける。畑ではこちらから何も言わなくても仕事の段取りがわかる様で、日本の20才の青年に、こんな子に会うことはまず難しいだろうと思った。今後、時流の波にのみ込まれてゆくことなく、自給農の道を探り続けてくれることを願ってやみません。

寺田まさふみさん (出石郡出石町)

(シコンさんは) 堪能な日本語で

帰国研修生短信 (タイ)

<北部>

コマさん (87年度)

11月頃家の隣に養殖池を作り、魚を飼い始めました。水草を入れ、虫取り用の電気もつけて魚のえさにしているのです。餌代はかかりません。

コマさんの土地で5家族が共同でイチゴ作りをしており、収穫は1日おき。病気対策でスプリンクラーから点滴灌水に切り替えました。生食用は80パーツ/kg (1パーツ=3円)、加工用や小粒のものは12～3パーツで売れます。11月～4月はイチゴを、5月～10月はとうもろこし、キャベツを作っています。

ブラチャックさん (98年度)

鶏糞の肥料でお米を作り、収穫は約4320kg。義父、義母、ブラチャックさんの3人で農業をしています。雑貨屋の手伝いもしており、チェンマイへ仕入れに行ったり、週に2日近所の村を訪問販売で回っています。

ベリポーさん (99年度)

環境NGOで働くお連れ合いは出張

<東北部>

サウエーさん (90年度)

収穫はうるち米約1800kg、もち米約4000kg (昨年は6000kg)。6～7月の大雨で水につかり収穫は減ってしまいました。牛は6月に4頭売り (母牛: 10000バーツ、子牛: 4000バーツ/3頭)、現在は3頭飼っています。鶏は約50羽を放し飼いにしており、食用ナマズを少々飼っています。1月からはたばこ、ピーナッツ、とうもろこしを作る予定です。

ノバトンさん (00年度)

農民運動の活動家として有名なバムルンさん (89年短期) の有機農業の取り組みを3人で10月まで手伝っていました。しかし自分の家のたんぼでの稲刈りのため、一時中断。今年はおもち米約5800kg (50パーツ/10kg)、うるち米約2000kg (45パーツ/10kg) を収穫しました。米のほかに自家用に野菜も少し作っています。養殖していた淡水魚は、池の水質が悪化し、全滅したそうです。

室見千尋さん (太陽保育園)

彼(ケユーンさん)は、何と云ったらいいでしょうか。数十年ぶりに遠い所から帰って来た息子の様な存在でした。私たちは彼に親孝行をしてもらいました。

末次清士さん まり子さん

(鳥取県江府町)

アルウィさんは、我家で私の子供達と仲良く遊んだり、食事のあとはかたづけを毎日してくれたり、「ありがとう」とよくお礼の言葉をいってくれたり、大変よい人柄です。(タベ村が将来)近代化しても、見失ってはいけない大事なものが何かわかる人でしょう。

農業、共にがんばりましょう。

市川克久さん (鹿児島県霧島町)

この1年間、研修生のご指導やホームステイ等でお世話いただいた皆様、本当にありがとうございました。

人づくり ～これからの社会の担い手をどう育てる？～

報告者

九野坂 明彦さん/庄内町生活体験学校
 大森 昌也さん/百姓・あす農場
 洪 淳明さん/韓国ブルム農業高校校長
 渡 辺 省悟さん/篠山ナマステ会代表
 バラト・ピスタさん/ネパール・82年度

九野坂さんは、子供達が何でも自分でやる、動物の世話をする、残飯を堆肥として野菜を作る、汗を流す、汚れと戦う、このような生活体験を親と子が一緒になって地域と密着し、日常的な取り組みとして行っている。大人がしんどがらずに子供達にこの始まりから終わりまでを体験させる。現在は自分と違った意見を認めない風潮が子供にも強いが、大人がお互いに異なった意見を認め合うことが大切だと考え体験学校を運営している。

大森さんは、子供にとっては大人がどう生きているかが重要、また自然は自然、不自然は不自然と思える感覚を育てることが大切。命のふれあいを大切にする生活、いろんな命と触れ合う、日常生活の中で動物の生死を見る生活が大切、子供を自然の中で育てることが必要と発言。

一人一人の生徒を大切に生きることの大切さ、人生の意味、人とし

て生きるには何が大切か教えている洪さんは、20年後をしつかり見つめさせる教育が大切で理論だけではなく、生活に直接実施される環境教育、平和教育を通して君達の世代は平和を実現する責任がある生徒にと話している。

渡辺さんが、帰った研修生と協力してネパールの村に学校を建てているねらいは、ネパールの子供の為に51%、日本の子供の為に49%である。日本の子供達もネパールの村の人と一緒に生活をし作業をした。この体験を通して子供達に自分で考え、行動するという姿勢が生まれ、実践されており、人づくりには体験を重視した教育が大切と指摘。

日本での研修後ネパールでNGOを立ち上げたバラトさんは以前は人づくりはあまり考えなかったが、村のためにできる事が何かあると考え、村の人と相談し、一番身近な問題である女の子の生活を改善する活動を始めた。カーストが低く、親が学校に行っていないので、勉強の必要性を感じていなかった人達にも、この

活動を通して、勉強や子供の健康のことなどについて考えるようになってきた。学校に来るようになった子供達は、将来私達も学校に来られない子供のために頑張りたいと言っていると報告。

大人が子供達に漠然と接してはいけぬ。事の善悪をしっかりと教えることが重要。労働する、生産する、他人と共に生活する、これらを通して喜び、苦しみを体験させなくては、との意見が会場からも出された。



も見られるように、今までの近代農法がどのように環境に影響を与えてきたか、また有機農業をやると生産量が落ちると言われているが、近代農法で貝や魚などが減っており、米の生産量は上がったが、自給的に食べていたものが地域全体から減少しているということ、食生活の変化、人口増加に伴う食糧問題、有機農業への政府援助の必要性等、参加者からの質問も多く、活発な意見交換となった。

そして日本の地場生産・地場消費の様子をアジアの有機農業従事者に見てもらおうという交流があることや、低価格輸入品の日本の有機農業者への脅威等、近年日本において農と食の話では切り離せなくなったグローバルゼーションに伴い生じた外国との関係及び問題にまで話が広がった。

毎日の食卓に上がるほとんどのものが外国産であるという状況の中で、日本の食べものについて身近なところからゆっくり考える必要がある、と感じる機会となった。

市民の社会参画

～これからの社会の担い手をどう育てる？～

報告者

早瀬 昇さん/大阪ボランティア協会事務局長
 実吉 威さん/市民活動センター神戸代表

両氏とも活動を通して見えてきた日本社会の変容、あるいは逆に活動を通して自分自身の社会や地域に対する考え方・見方の変容については「つなぐ」をキーワードとして挙げた。



早瀬さんは大学入学以前からベ平連（日本でのベトナム反戦の市民運動のひとつ）への興味がきっかけとなり、大学時代に違うテーマではあったがボランティアをすることになった。実吉さんは大学卒業後、銀行員を辞め、4年程フリーターをしつつ途上国を旅行するうちに「何かしたい」という気持ちになっていた。そこに阪神淡路大震災があり、市民活動に関わるようになった。

つなぐボランティアしたい人々とされた人のように、それぞれのニーズをつなぐということ。そうした「つなぐ」活動が、当初、早瀬さんが、親にさえ理解されなかったボランティアということが広く社会に認識されてきた点に変化を感じるということだった。

これに対して実吉さんは、活動の中で地域の課題を「みんなで」解決できるかが重要との認識を持ったと述べた。そこから行政に働きかける一方で、自分たちも地域の改善に向けて何か行動する（例えば公園の掃除）必要性に気付いたのが自分の変化であると述べた。

さらに話はボランティアとしてか

かわることから、市民活動の力で見えてきた日本社会の変容、あるいは逆に活動を通して自分自身の社会や地域に対する考え方・見方の変容、あるいは逆に活動を通して自分自身の社会や地域に対する考え方・見方の変容については「つなぐ」をキーワードとして挙げた。

早瀬さんは英語で公（こう・おおやけ）にあたるpublicという単語の意味、「開かれている」点を強調する。市民活動を通して、市民が自らの社会作りを行政まかせにせず、自分から参加することが大切だと述べた。実吉さんは現在の不況などの社会不安が、企業や行政に集中してきた人材や資金の資源を市民活動へ向けさせ、「地域をよくしよう」という動きが加速度的に盛り上がっていくのではないかと述べた。

社会の主人公は市民であり、市民は企業、行政、市民活動団体だけでなく、自分たちでできることから取り組む必要があることが確認され、今後、PHDをはじめとする様々な活動に参加し、つながることで社会と自分の可能性を開いていくことができるのでは、とまとめられた。

地域での暮らして国際協力

報告者

荒川 純太郎さん/広島県・地球市民共育塾主宰
 日高 久志さん/島根県・瑞穂アジア塾代表
 内山 信子さん/福岡県・北九州アジアを考える会副代表

荒川さんは、キリスト教の牧師であることから、礼拝を通して人々にアジアへの関心を持ってもらおうと考えた。人と教会を巻き込みながら活動し、人と人がであうなかで、自分の目標を見つける、また、人々と交流する機会を提供することにより、アジアへ出かけて行く人を育てたいという思

れることを教えることもしつけであり、このことを学校教育を通して伝えたい、研修生と子どもたちの交流の場が必要で、PHDの研修生の話を通じて子どもたちに聞いて欲しいとの思いから地域の小学校長に直談判した。そして1クラスと研修生という規模の交流が始まり、それが全校集会に、最終的には総合学習としてカリキュラムに組み込まれるまでになった。交流を通して子供たちの喜ぶ姿を見た親にも少しずつ変化が見られ、子どもたちの交流から、地域の大人との交流に広がった。

い活動を開始した。また、アジアに関わっていくには様々な方法・切り口がある。いろんな切り口でいい、やれる人がやる。そのためには国内における国際化、つまり、広い視野を持つ人を育てる必要があると考え、開発教育に力を注いでいる。

内山さんは、子供たちが外国人を指差すことがなくなるよう、ふれあいだけではなく自分と違う人を受入

からくる思いやりで、研修生のホームシックやそれぞれの苦勞を理解することができるようになった。また、地域特有の芸能文化の元気を回復させていくために、異文化交流を重視している。村の人が自分たちの田植え囃子や神楽などを持ってタイに行った時、現地の方に歓迎され初めて実感として国際協力・交流の意味が分かり、タイの表向きの生活だけでなく裏の大変な部分も見えてよかった。地域としては、アジアの人との交流により、衰退していく地元芸能・文化の意義を再確認し、もう少し取り組みを続けていこうという方向に変化している」と報告した。

日高さんは活動をする中で見えてきたこと、地域の人の変化として、「瑞穂は人口が少なく高齢化が進んでいる。高齢者が外国人である研修生をどう受入れるのか興味があった。しかし、意外にも高齢者の方がかえって研修生をすんなりと受け入れ、長年の経験



農業と食と健康

報告者

橋本 慎司さん/国際有機農業運動連盟アジア理事、農業
 信長 たか子さん/食品公害を追放し、安全な食べ物を求める会代表



提携運動をしていることの報告があった。

消費者グループをまとめる信長たか子さんからは、「共同購入は生産者と共に自分たちの生活を作っていくためのものである。一人の生産者で50世帯が養えると言われていることから、まずは私たちのまわりに生産者を見つけ、消費者が50世帯集まる。物の関係だけでなく人間的な関係もでき、生産者と消費者がつながることがあちこちにできればと思う。今、日本は健康を害し、農業も衰退させている状況なので、これからの将来の子どもたちのためにも、よい農業を育てていきたい。自分の食卓だけがよければ、自分の子どもだけがよければいいという問題ではない。これは世直し運動の一つであり、ただ食べ物だけの問題ではない」という報告があった。

しじみや鮎などの生物の減少から

命の基本をどう手に入れるか？

生産者の橋本慎司さんからは、日本の有機農業は土と身体はふたつにあらざうという「身土不二」の考え方、つまり地域で採れた物を食べて健康を維持するという生命の根本的な生態系のあり方から始まっていること、そして生産したものをできるだけ近い地域の人に食べてもらうことで環境を守り、健康を取り戻せるのではないかとこの考え方を根本に

■ 総括ディスカッション

「これからの国際協力、これからのNGO/NPO、これからの私の行動」

パネリスト

平田 哲さん/関西NGO協議会議長
慶山 充夫さん/神戸新聞論説委員編集委員
今井 鎮雄/PHD協会理事長

司会者の20周年行事をただのお祝いだけでなく、PHDの今後を考える一つの区切りとし、社会に対するNGOや個人の役割などについて考える場にしたかったとの説明から始まった。

平田さんは、PHDが行うアジアと日本の相互の学びと分かち合いはPHDの独自性であり、またアジアと共に生きようとする姿勢は、慈善だけでなく社会正義の実現が基礎にあると指摘、その意味でPHDの役割は今後も重要であり、その将来を考えるにはこれまでの評価と反省が必要と発言。

慶山さんは長年に亘ってジャーナリストとしてPHDを外から見た立場として、草の根の人をスカウトしてくるというPHDの基本的な精神を評

価。次いで今井理事長がNGOは国にとらわれず人の代表として、人類が共に平和を得るために働くものであり、「生きるとは分かち合うこと」というPHDの理念はそれにならなっている。しかしPHDが行ってきた活動が、それぞれの国で大きな力となってお互い同士が次の世界の平和を導くことにつながるのかと問うた時、さらに大きな役割があるように思うと振り返った。

ここで9月の事件にも言及し、



PHDの社会的影響力を強める方法を司会者が各パネリストに尋ねた。慶山さんは、PHDの地域作りの研修一協同組合やリーダー養成研修を深める必要性を、平田さんは、PHDを含むNGOは情報を全国に発信しつつも、地方性を強調し、地域社会の市民参加によってこれが強化されるべきであり、地域の担い手を育てるのがNGOの基本で、そのことが日本の中で開発教育にもなるのではとコメント。これらを受けて今井理事長がボランティアという言葉を挙げ、ボランティアは自主性が重んじられるが、決して無責任なものではなく、お金を対価としてもらう仕事よりも責任がある。そうした自覚のもとにボランティアが集い、働くことがPHDのようなNGOだけでなく、社会全体の発展に寄与するのだとまとめ、2日間の討議を締めくくった。

■ 20周年記念行事番外編

パプアニューギニア・トーク&コンサート

10月6・7日のしあわせの村での20周年行事には残念ながら間に合わなかったパプアニューギニアの2人、ヘルベ・ヨーワさん(90年度)とボンガス・ガンゴさんは11日に来日。関西空港に到着、その足で名古屋に直行。南山短期大学でのトーク&コンサートを皮切りにシリーズが始まった。



村での活動を報告するヘルベさん

パプアニューギニアからは、今期のシコンさんを含め、これまでに10人の研修生を迎えている。

ヘルベさんはその招聘のカウンターパートの団体、ルーテル開発奉仕部(LDS)のフィールド・コーディネーターとして、モロベ州フィンシャーフエで農業振興と環境に調和した林業

を担当してきている。ジャングルの中に点在する村々をバイクと徒歩で巡り、助言、指導をしている。

ボンガスさんは最近ソロ活動が多いが、パプアニューギニアのヒットチャートで13週連続1位のヒットをとばしたレックスバンドのボーカル、ギターのプロミュージシャン。しかし、フルタイムではなく、音楽の仕事がないときは村で農業の半農半音?の人。阪神・淡路大震災の年、被災地慰問コンサートで来てくれて以来2度目の来日。彼の歌は今のパプアニューギニアの現状の社会問題への働きかけを歌うものが多い。それがこの地域に戻ったPHDの研修生の取り組みにも共通するものがあり、準研修生的存在だ。

名古屋の後は岡崎の人間環境大学、ヘルベさんがかつて研修をうけた鳥取県の日野町、羽合町での交流、さらに京都で行われた関西NGO協議会主催の「関西NGO大学」に参加、最後は神戸でのミニコンサートで締めくくる14日間。ボンガスさんの歌は一段とメッセージ性が高まり、ヘルベさんの手製のタイコ“クンドウ”

も好評。演奏の合間には村の生活、熱帯林、開発や援助についての話が折り込まれた。

SURVIVAL 詞: ボンガス・ガンゴ

私は生き残りたい
この世界は複雑すぎるけど
生きていくには
多くの物が必要なのに
手に入れることができない
でも生き残るために考える
今こそみんな同じ目標を持ち
ひとつになって歩き出そう
ひとりぼっちでは生きていけない
世の中だから
ひとりているのはつらいから
立ち上がる時が来た



新曲を披露するボンガスさん

恒例 年末年始 北タイ・スタディツアー報告

参加者のレポートを一部ご紹介します。

(2001年12月23日~2002年1月2日)

最も大きな新発見の一つは時間の流れです。こんなにのんびりとして静かな時の過ごし方があるとは知りませんでした。特に何をすることもなく、昼寝をしたり散歩をしたり、1日の計画を立てずに時を過ごす。精神的にとってもリラックスしていました。日中はとても静かで、朝は鳥の鳴き声で目覚める。こんな世界もあるのだ、としみじみ感じました。

(多々内智子・箕面市・大学生)

印象深かったのは、麻薬中毒者のリハビリセンターでした。ヤバーという麻薬が一錠30パーツで手に入り、お昼が普通20パーツで食べられることを考えると、手を出せないほど高い値段ではないのかもしれませんが。9人の患者さん(全員モンの人)が生活をしていました。1回につき、3ヶ月間受け入れ、山でとれる葉草をお茶に煎じて飲み、聖書の勉強をします。受け入れは1人2回までで、これまで約380人を受け入れ、治療できた人は200人程ということでした。

(笹間郁子・伊丹市・国内研修生)

私は学校の卒業研究を「発展途上国のごみ問題」とし、カレンの村を題材にしました。私が言う「ごみ」とはビニール袋などのプラスチック、ガラスや金属を含めて簡単に土に戻らないものを指します。

ムシキーの村は以前行った時と同じで、道の端も家の辺りにもほとんどごみは落ちていませんでした。バナナの皮や野菜のくずさえ、その辺りに放り出さず集めていました。一方卒業研究の対象地域としたメーサリアンの村では、ビニール袋や空き缶が道の端に山ほど捨てられていました。

少し大きな町では家の前に直径50cm、高さ30cmぐらいの黒いごみ箱があり、夜中にごみ回収車が走っていましたが、村では回収という制度は発達していません。今後も村へのプラスチック製品の進出はとどまるどころか拍車がかかり、ごみを片付ける方法を本気で考えないといけないだろうと思いました。

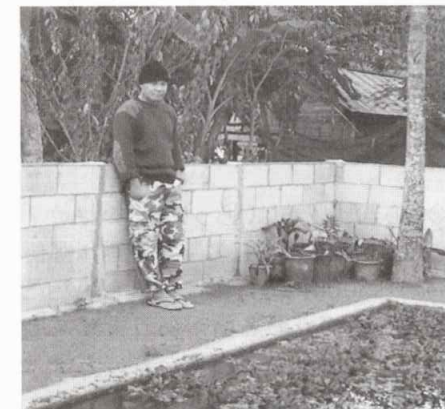
(寺田栄・加古川市・専門学校生)

家の周りに果樹がたくさん植えられ、どこの家でも鶏と豚か牛のどちらかを飼っているのには驚きました。今までこのようなアジアの農村を見たことがありません。豊かな農村であると感じました。泊めていただいた家にはテレビと冷蔵庫はあるようでした。しかし、果物、鶏の肉、卵を庭から得て、換金用に豚か牛を飼うという理想的な生活をし、豊かさを見たように思いました。カレンの人々は皆このような生活をしているのか、山奥ではかなりの格差があるのかも知れません。

(田村嘉應・宇都宮市・団体理事)

家の前にあった畑が大きなコンクリートの池に変わっているのを見て何をするのかと彼に尋ねると、笑いながら「ポッケオ村は山の中にあり、川は少なく魚を食べることは難しいので、池で魚を養殖して食べます。お父さん、来年もポッケオ村に来ますか?来年にはこの池の魚も大きくなっているの、食べてください。また、大きくなった魚は村の人に少しづつ分けて食べてもらいます」と言いました。彼のトマト、いちご、魚の養殖という発想の広がりには、頭が下がります。

(田中五郎・兵庫県波賀町・農業研修指導者)



コマさんと自作の池

ペー村にホームステイした時、来年度の研修生であるスラチさんが、ポロポロの古い日本語のテキストで、一生懸命日本語を勉強していました。彼が日本に来て農業を学び、この村の将来をより豊かなものにするだけでなく、日本とこの村の関係がずっとつながっていけると思うと、非常に楽しみになりました。

道中、向こうにはミャンマーが見え、うねうねの山道をくぐりぬけ、辺境の地かと思われましたが、村に着くとどこにでもテレビがあり情報が氾濫し、コココーラもあり、スナック菓子もあり、ごみもあり…。物質的な豊かさがあふれると、やがて心の豊かさを失います。タイには日本のようにならぬよう、新しい開発の在り方を探してほしいと願っています。

(河原塚望・春日部市・教員)



ペー村にて、左からサウェーさん(90年度)、スラチさん(02年度)、サワンさん(98年度)、ブラチャックさん(98年度)

僕が体験したのは「貧しさ」のほんの一部だったはずですが、自分は豊かさと幸福をイコールで結んでいなかったか、と思いました。同じバイクに2人乗りしている2人でも、日本とタイでは、どっちが「いい顔」をしているか?同じ学生でも、日本とタイの学生は、どっちが希望を、学ぶ楽しさを味わっているか?そう聞かれると、自分はどうしても、答えることができなかったのです。自分も含め、今生きている環境を築いていない人間は、その前の辛い時期を知らないこともあり、ついつい社会に甘えがちです。学校で学べるのが当然、学校の後は遊べるのが当然、土日は昼まで寝ることができるのが当然。日本とタイの子供の違いは、ここにあるんじゃないかと思いました。つまり、タイの子供はこの「当然」を築いていく真ただ中で生きていて、日本の子供は生まれた時から「当然」が築かれていたという違いです。このことを自分に考えさせてくれたのはタイの人々でした。数学みたいに答えが一つではないことを本当に学ぼうと思ったら、やはり人から学ぶしかないと思いました。

(中田脩一・名古屋市・高校生)

第20期研修生紹介

4月に3人が来日します。新しい研修生をよろしくお願ひします。

ダルミアティスさん (インドネシア、女性、30歳、既婚、イスラム教徒)



研修テーマ：保健衛生、栄養、洋裁

西スマトラ州タベ村から初の女性研修生。村では家事の他にも菓子を作って村びとに売ったりもしています。保健衛生や栄養についてしっかりと勉強したいそうです。

スラチ・バティスティクンさん (タイ、男性、29歳、既婚、仏教徒)



研修テーマ：農業、住民組織化

サワンさん(98年度)、ナロンデッさん(01年度)と同じペー村出身。山岳民族であるカレンの青年です。周辺の村にも多くの帰国した研修生達がいて、有機農業の実践などを目指しています。

スウェ・ウィンさん (ビルマ、男性、23歳、未婚、仏教徒)



研修テーマ：農業、住民組織化

96年度のカインさん以来となるビルマからの研修生です。困難な体制の中で制約を受けながらも頑張っている帰国した研修生達を応援するための招聘再開です。日本では有機農業を中心に学びます。

〇月×日のPHD協会

職員 芳田 年末年始はスタディツアー、元職員小松さんも合流して北タイを回る。毎日二人は最後まで食卓に。村のもてなしを残さずに。

職員 藤野 茨木でネットワークNGO全国会議に参加。70人の論客揃いの全体会の進行を仰せつかる。なんとか時間通りに終え、ホッと。

職員 古本 西日本研修旅行は出身地広島から、シコンさんの洋裁指導者芦田さん、事務局ボランティア宮田さんも加わって、車は満席、大騒ぎ。

職員 伊藤 年末募金の苦戦の挽回に閃いたのは当選番号発表後のタイミングの書き損じ年賀状回収。新聞に載せてもらっていい反応。嬉し。

職員 納堂 研修生の風邪のリレーにスケジュール狂いまくり。釜ヶ崎や但馬に全員で行くことができず。これまで順調が、最後であたふた。

職員 山西 協力が数年途絶えたライオンズクラブ335A地区から嬉しいお知らせ。復活へのお願いが身を結ぶ。研修生もご挨拶に。

(以上出稿日に早く来た順)

編集協力：増本一朗

PHD NEWS

◇会費・ご寄附寄託状況

2001年10月	84件	11,921,915円
11月	213件	2,872,697円
12月	404件	5,003,276円
2002年1月	114件	2,128,901円
	1,119件	21,926,789円

今年度も前81号で、年末募金のお願いをいたしました。以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴しました。皆様のご協力で心よりお礼申し上げますとともに、今後も一層のご支援をよろしくお願いいたします。

◇使用済切手も収集します！

現在、未使用・書き損じハガキ、未使用切手、ロータスクーポン、グリーンスタンプ、未使用・使用済プリペイドカードを集め、換金し活動

資金とさせていただきます。これからは使用済切手も収集することになりました。ご協力をよろしくお願いいたします。

◇お心当たりの方はいらっしゃいませんか？

2001年12月25日に宝塚逆瀬川郵便局から5000円の寄附をご入金いただきましたが、お名前がありませんでした。どなたかお心当たりの方は、事務所までご連絡下さい。

◇PHDオリジナル絵はがき

2000年10月に作成したPHD絵ハガキ。8枚組で500円です。ご購入いただいた方も、まだの方もいかがでしょうか？お問合せは事務所まで。



2002年度スタディツアー 予定が決まりました！

研修生の村を訪ね、村人の家に泊り、村の生活を体験する旅にあなたも参加しませんか？

◆ビルマ

7月下旬(約10日間)約25万円

◇ネパール

8月上旬(約10日間)約21万円

◆インドネシア

8月下旬(約10日間)約18万円

◇タイ(北部)

12月下旬(約10日間)約19万円